

大型台風通過による降雨で、気にされていた水不足も解消されたように思います。湖南平野では稲刈りがはじまり、農夫が運転するトラクターが田んぼの周辺を忙しく行き来しています。

☆発掘調査だより☆

1. 下之郷遺跡（第46次）の調査

下之郷町地先で5月下旬より宅地造成工事に先立つ調査を進めてきました。その結果、弥生時代中期後葉の大溝2条と壁立式平地住居1棟、井戸、土坑、古墳時代前期の大溝1条などが発見されました。見つかった弥生時代の大溝は、幅約4m、深さ約1.5m、断面形状がV字形のもの（大溝1）と幅約4m、深さ約1.7m、断面形状がU字形のもの（大溝2）があります。いずれも中期後葉（近畿第IV様式の中葉）の弥生土器や木製品が出土しています。大溝に埋もれた土砂をよく観察してみると、溝底には、水の中にゆっくりと沈殿するように堆積した粘土や植物遺体を確認され、当時は水をたたえていたものと推測されます。

この大溝2条が発見された地点は、下之郷遺跡でこれまでに確認されている西側の3条環濠のさらに西約240mの地点にあたり、その外側では弥生時代の遺構が確認されていないことから、集落域の西辺を境界し外周をとり巻く『外濠』の一部と考えられます。この結果下之郷遺跡の東側では、連続して多重の環濠が掘られているのですが、西側では3条の『内濠』があり、その外側に距離をおいて『外濠』があるという2重構造になっていることが推定されます。遺跡の全体規模を考えると、東端から西端までの距離は約670m、南北が約460mで、面積はおおよそ25ヘクタールにもおおよび、近畿の弥生集落の中でも屈指の大集落と言えます。『内濠』と『外濠』

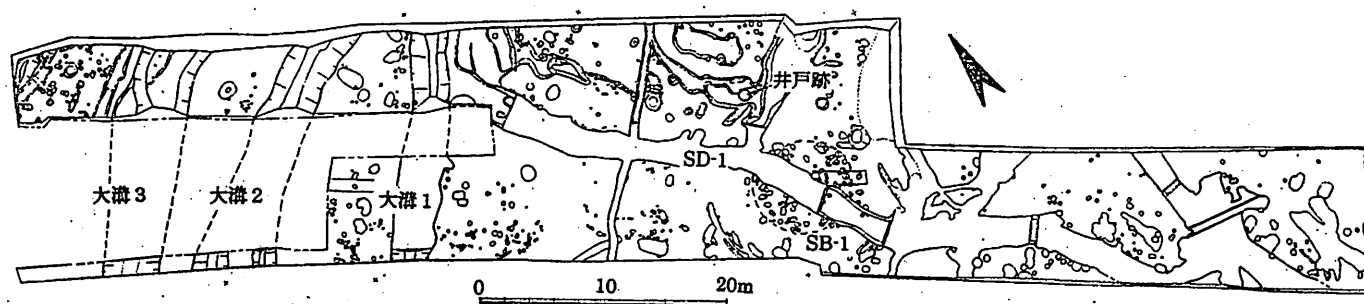


検出された大溝1（掘込）

目 次

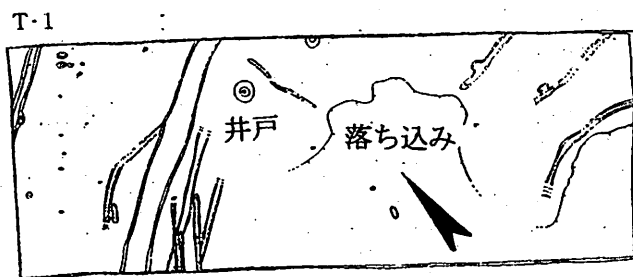
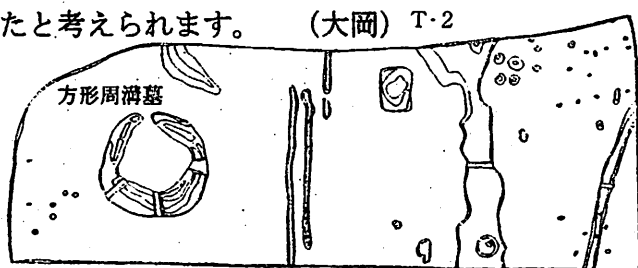
☆発掘調査だより☆	
1. 下之郷遺跡	1p
2. 金森東遺跡	2p
3. 堂ノ北原遺跡	3p
4. 古高経田遺跡	
5. 吉身西遺跡	
☆文化財の窓☆	4p
「下之郷遺跡の玉つくり」	
お知らせ	4p

との間には、壁立式平地住居や井戸跡などが確認されており、居住域になっていたと考えられます。またこの居住域の内部にもL字に掘られた区画溝（42次地点）が検出されていて、外濠内部に特殊な区域が設けられていた可能性があります。下之郷遺跡では、外濠で区画された地域、内濠で区画された地域、さらに内部の方形区画、と複雑な集落構成をもっていることがうかがえ、これらが当時の社会組織や集団関係を考察するにあたって重要な鍵をにぎることとなるでしょう。（川畑）



2. 金森東遺跡（第30次）の調査

現在、金森東遺跡では道路部分の調査が終了しました。T-1の南側では黒褐色土が厚く堆積した落ち込みが、北側では数条の溝と井戸が検出されました。いずれの遺構も遺物が少なく、時期を断定するには至りませんでした。T-2では数条の溝のほか、ピット、方形周溝墓が検出されました。ピットは調査区の北西に集中しており、何らかの建物が建っていた可能性が考えられます。時期は遺物が少なくはつきりしませんが、隣接する山柿団地造成の際の調査でも同様のピットが集中する部分が確認され、時期は奈良時代と比定されていることから、今回見つかったピットも同時期の可能性が高いと考えています。方形周溝墓は、一辺が4mほどの小型のもので、周溝からは、高杯、壺などが出土しており、これらの土器から弥生時代後期に築造されたと考えられます。（大岡）

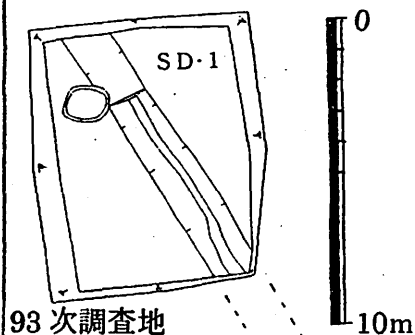


3. 堂ノ北原遺跡（第4次）の調査

吉身三丁目字門口において、宅地造成に先立つ調査を7月9日から行ってきました。調査は道路予定地部分の約620㎡が対象で、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、落ち込みを検出しました。竪穴住居は一辺3m×3.5mの規模を持つ方形プランで、深さ約30cmを計るものが1棟見つかりました。遺物には、埋土および床面から5世紀代の土師器（高杯や甕）にともなって滑石の原石やチップ、白玉、管玉未製品、緑色凝灰岩、石英、玉を磨いたと思われる砥石、紅簾片岩製の石鋸があることから、玉製品の工房跡ではないかと考えられます。また、約2cm大の水晶片が6点ほど出土していることも注目できます。掘立柱建物は5間×3間以上や2間×4間など、4棟の建物が想定できます。柱穴からは土師器の皿、緑釉陶器の碗が出土しておよそ10世紀頃と考えられます。また、周辺の土坑からも緑釉陶器の碗や、いわゆる「手の字皿」が見つかり、同時期と思われます。これまで遺跡内では3回の発掘調査を行っており、玉に関係するような遺跡は確認されていませんが、今回の発見によって周辺域で見つかるのではないかと考えられます。（畑本）

4. 古高・経田遺跡の調査

前号で報告しましたトレンチ6から調査は更に北へ進み、現在、トレンチ9の調査を行っています。トレンチ7では、前号で報告した旧河道の続きが検出されました。トレンチ8、9では、縄文土器やサヌカイト片を含むピットをはじめ東西方向に流れる古墳時代後期の溝、縄文土器やサヌカイト片を含む同一方向の溝が見つっています。また、一辺約3mの古墳時代前期頃と考えられる小型の竪穴住居1棟も見つっています。トレンチ8、9では、これまでの調査区よりも縄文土器やサヌカイトが多く出土していることから縄文時代の集落域に入ってきているのではないかと考えられます。（藤原）



5. 吉身西遺跡 (第93次) の調査

個人住宅建築に伴い調査を実施しました。その結果、4月に実施した91次調査で見つっている溝（SD-1）の延長部を検出しました。溝は幅約1.5m、深さ約70cmの規模で、ほぼ南北方向に掘削されています。今回、遺物は出土していませんが、91次調査では奈良時代頃の土器が出土しています。（小島）



☆文化財の窓☆

下之郷遺跡の玉つくり

1980年に発見された下之郷遺跡では、その後21年の間に約46箇所が発掘調査および範囲確認調査が行われてきました。この間の主な発掘調査である第3次調査及び第25、27次調査では、玉つくりに関する遺物が出土しています。第3次調査では、土坑から碧玉を用いた管玉と形割（かたわり）品が各一点、石鋸1点が出土しています。管玉は直径約8mm、長さ3cmの完形品でした。形割品は直方体状で方形状碧玉の2角に穿孔痕の残るもので、緑色のきれいな石です。石鋸は、紀州（和歌山県）産と推定される紅簾片岩（こうれんぺんがん）を板状にしたもので、端部は丸くなっています。第25、27次調査では、柱穴や溝等から、合計10点を超える石鋸が出土しました。石材は第3次と同じく紅簾片岩で大きさは掌に収まり、端部は薄く、丸いものでした。守山市内では、中期前半の服部遺跡、寺中遺跡でいずれも掌に入る小さな、薄い石鋸が出土していて、弥生時代中期までの玉生産には比較的小型の石鋸が使用されたのではないかと推定されています。肝心の玉は、第3次には直径0.8cm、長さ約3cmの管玉が1点あるだけで、完成品や未製品は他に見当たらないので、碧玉の玉つくりが実際、どのような規模で行われていたのかは今後の課題ですが、石鋸の多量出土で、村の内部で玉生産が行われていた可能性が高くなったといえます。なお、玉つくりが行われた場所については、3条の環濠の内側の中央付近に工房があったと推定されます。

下之郷遺跡では、村の中で石斧や石鏃が生産されていましたが、石鋸の出土で玉つくりが行われていたことも推定できるようになりました。下之郷遺跡では、生産具（石斧、鋤、鍬など）、武器、武具（石鏃、石剣、石戈など）の生産とともに、身を飾る玉も同時に行われていたのです。完全な自給自足ではありませんが、石の素材を遠隔地から手に入れ、適材の木を加工して様々な用途の品を生産していたのです。弥生時代の拠点集落は、その内部に青銅、玉、石器などの工房を配置していることが多く、下之郷遺跡も近畿地方の大規模環濠集落と同様の構造があったと言えます。（山崎）

市内の文化財行事等 お知らせ

☆赤米の開花まじか！！☆

下之郷遺跡のなかで吉身小学校（5年生）と「赤米」の栽培実験をおこなっています。赤米は、玄米のヌカにあたる部分が赤色をしているお米の品種のことを一般的にそう呼んでいます。下之郷遺跡で児童が育てている赤米は、日本で古来より伝承されてきた3つの品種で、現在の「コシヒカリ」や「日本晴」と言った品種とは、外見や生育が違います。現在の品種と最も異なるのは、茎が太く、大柄でとにかく背丈が高いこと。それから、籾の先端に針のような長いヒゲ（ノギ）が付いていること。それから、出穂時期が遅いこと。などがあげられます。現在、市内で栽培されている品種は早生（ワセ）品種が多くすでに、刈り取りが終了した田んぼも多く見られますが、下之郷遺跡で栽培している赤米はこれから出穂・開花となります。花の見ごろは9月10日頃からだと思います。子供たちが作った案山子（かかし）と秋風にそよぐ赤い稲穂は、時空を越えて何とも言えぬ郷愁を誘います。見学をどうぞ。

※ 栽培場所は3pの地図に印しました。

（k記）



稲の昔（在来品種）と今（現在品種）